

産婦人科診療の現状と将来への展望

産婦人科部長
周産期母子医療センター長中原 博正
Nakahara Hiromasa

私たち産婦人科は、従前より、婦人科腫瘍、周産期、および産婦人科救急を三本の柱として診療にあたってきました。産婦人科診療の中で、時間と労力を要する分野ですが、地域の先生方にご紹介いただいた患者様によりよい医療を提供するために、これを継続していきたいと考えています。さらに、日々進歩する医療に即応して、高度で専門的な診療の導入に取り組んでいくことも必要です。本稿では、当院の産婦人科診療のここ数年間の現状と、現在取り組んでいる課題、将来への展望をご紹介します。

1. 婦人科腫瘍の診療

長年この部門を牽引してこられた松隈先生の退職後、小川伸二部長を経て、本年より衛藤貴子部長が就任しました。二人は、九州大学や九州がんセンターで修練を積んできており、子宮癌や卵巣癌の手術に積極的に取り組んでいます。たとえば、進行癌に対して、傍大動脈節までのリンパ節郭清や、外科、泌尿器に応援を求めて、腸管、膀胱の浸潤腫瘍の切除を行い治療効果をあげています。その一方、比較的早期の癌においては、術後の排尿障害やリンパ浮腫を軽減するため骨盤神経温存手術やリンパ節生検のみにとどめる縮小手術を行うなど、個々の症例に応じて手術方法を選択しています。子宮頸癌の放射線治療は、常勤の放射線科の治療専門医により行っています。進行癌が対象となることが多く、ほとんどの症例で治療効果をあげるために化学療法（CDDP10mmg 週1回）を併用しています。化学療法は月に40-50コース施行しています。副作用の少ない症例は、3年前より外来化学療法を導入しました。これに

より、病床に余裕ができ、遅れがちだった化学療法がほぼ予定どおり行えるようになりました。最近の抗がん剤の進歩はめざましいものがあります。常に最新の医療を提供するためにも、これらの臨床治験に積極的に参加することが今後の課題と考えています。

子宮筋腫や良性卵巣腫瘍などに対する手術療方は、従来開腹手術を主体として、ごく一部の良性卵巣腫瘍のみに腹腔鏡手術を行っていました。2年前に東條医長の赴任により、倫理委員会に申請後、腹腔鏡手術を本格的に開始しました。最初は卵巣腫瘍からスタートしましたが、大きな事故もなく腹腔鏡下子宮全摘術や筋腫核出術を開始しました。昨年度は腹腔鏡下手術は100例を超える実績を上げました。本年度は、東條医長、川上医長に加えて、桑原医師が加わり、術式の安定化と安全性の向上に取り組んでいます。また将来的には、子宮癌手術への応用も検討を開始しました。

2. 周産期医療

地域周産期センターとして、中原、川上医長を中心として診療にあたっています。最近、数年間は分娩数は400-480で推移しています。その7割が合併症妊娠で母体救急搬送が60件 帝王切開率は45%前後です。当院の周産期医療の特徴は先天性胎児異常の診断とその周産期管理が多いことです。NICU、小児循環器や小児外科、心臓外科が充実していることを背景としています。最近の出世前診断技術の向上により年々紹介数が増加しています。また、大分や山口県など遠隔地から紹介も受けています。特に、先天性心疾患の児が多

数を占めており。このような症例では、妊娠中より小児循環器医とともに検査を行い、疾患の説明や予後、治療などを、ご両親に複数回の説明を行っています。これにより診療に不可欠な、児への受容や愛情形成をはかっています。

地域医療の観点からみますと、当院の周辺の黒崎地区に分娩を扱う施設がなくなってしまいました。近くにかかりつけ病院がないと不安に思われる妊婦さんも多いと思います。このような状況を鑑みて、本来は周産期センターとしてハイリスク妊娠の診療が使命ですが、可能な限りローリスク妊娠も受け入れています。妊婦さんより問い合わせがあった場合、地域の先生方を受診して妊娠の診断を受けた後に、ご紹介いただくよう説明しておりますので、よろしくお願い申し上げます。

周産期医療に携わる医師数の減少は深刻で、近い将来 分娩取り扱い施設の再度の集約化が起ると予想されています。地域に貢献する、地域に不可欠な周産期センターとして活動し、努力することが必要であると考えています。

3. 産婦人科救急

周産期救急や子宮外妊娠、卵巣腫瘍茎捻転などの婦人科救急に対応しています。以前は、地域の先生方からの紹介の二次-三次救急がほとんどでしたが、最近、婦人科救急は当院の救急外来で婦人科疾患を疑われた症例が多くなっています。そのほか、時間外に月経困難などの軽症例の一次診療や電話問い合わせなどが頻繁に起こっています。当直医を疲弊させないためにも、地域の先生方と時間外診療への対応を考えていくことが今後の課題と考えています。

私ども産婦人科は、今、世代交代の時期にあります。地域に根ざし、貢献する医療を展開するために、将来へのV i s i o nをはっきり持って、次世代へ引継ぎたいと考えています。

